

助産学領域 DATA

周産期医療の高度化および多様なニーズに対して、研究的な課題解決能力と高度専門的な状況判断と助産ケアを修得できること、同時に出産施設と地域を連結して継続支援できる高度専門職業人（助産師）の基礎を修得する能力を培います。



KEYWORD

母乳育児支援、妊産婦ケア、出産準備教育 など

CHECK

少人数 × 対話型を重視したアカデミックな教育体制

助産学領域は助産師国家試験受験資格を取得し、将来の助産師として活躍できる素地を養成するために、定員4名という他の教育機関と比較して少人数の教育体制を整えています。そのため、自ら考え行動し、積極的に教員と意見を交換する対話型の講義・演習がメインとなります。また、実習と研究指導を両立させるために座学講義の多くは日中に開講します。

CHECK

助産師としての能力・措置を最大限に高める実践的なカリキュラム

助産学領域では妊娠・分娩・産褥各期の診断、助産実践等の基礎的な素地を学ぶ科目はもちろん、多職種連携や地域における専門職の役割、在日外国人とその家族への支援、助産院の開業と運営のノウハウ、諸外国の文化・慣習別の支援方法など、助産師を取り巻く幅広い状況に対応することができる実践的なカリキュラムを設けています。

CHECK

ふれあいグループの医療施設を十二分に活用する助産学実習

座学での講義・演習の集大成たる助産学実習は、本大学院が属する「ふれあいグループ」の医療施設を中心に実施しています。その多くが地域に根差した医療機関として評価を受けており、トータルで500時間にも及ぶ実習を受ける場所としては最適な場所といえるでしょう。指導にあたっては、本学の教員と各病院の医療従事者と看護部教育担当が強力に連携して実習指導にあたります。

過去の修士論文テーマ

- 「助産師の直観的洞察力尺度の開発と信頼性および妥当性」
- 「母親の育児エネルギーと専門家のケアおよび家族の支援の関連探索研究 -Clausen,J.P.の育児エネルギーの概念図から-」
- 「出産後の母親の孤立感からの立ち直りのプロセスとレジリエンスの探索」
- 「COVID-19 陽性妊産婦のケアに関する助産師の困難感と支援の在り方」
- 「父親の育児支援クラスの参加と育児行動との関連性」
- 「Clausen,J.P.の育児エネルギー概念図に沿った、母親の育児エネルギーの変化と成育歴の関連」

授業 PICK UP

助産学概論

助産学に関する導入講義として、主要概念と国内外の諸理論の理解、コア・コンピテンシーと助産師を取り巻く法制度、性感染症やジェンダーに関する最新の動向等をも織り交ぜながらわかりやすく講義します。論文のクリティークやプレゼンテーションなど、受け身ではなく積極的な参加姿勢が求められます。



授業 PICK UP

地域・国際助産学特論

助産学に関する諸理論、とりわけ母子保健の現状と課題や、地域における助産師の役割、災害時の母子支援等の諸問題について課題ワーク、ディスカッションを通して理解を深めていきます。国内外における多種多様な資料の理解、対話による自己と他者の考えの対比を通して、助産実践力のさらなる向上を目指します。



在学生の声 Voice

元々助産師に憧れを持っていましたが、子育てと仕事の両立は大変で助産師の夢を半分諦めていました。そのような中、大学で開催された講習会の助産学領域の先生ががきっかけで、大学院への入学を決めました。現在は、修士として必要な研究力を日々学びつつ、妊娠中の体重増加が不足している妊婦に対する助産師の支援について研究を進めています。わたし自身も経験してきた妊娠や育児を振り返りながら、助産師としての自分のあり方について考えていきたいと思っています。



すずき えりか
(鈴木 英莉香さん/2022年4月入学)

在学生の声 Voice

助産師は周産期に限らず様々なライフステージにある女性の一生に寄り添い、支援する職業であるということに憧れを抱き、目指すようになりました。大学院での2年間を通して科学的根拠に基づく高度実践能力や思考能力、助産師としての自律性を身につけ、マタニティサイクルにある母子への助産ケアはもちろん、女性の生涯を通じた幅広い看護を実践できる助産師になりたいと思います。



ふかさわ もえか
(深澤 萌日さん/2022年4月入学)